

湯の丸高原（レンゲツツジ群落）

6月下旬になると、湯ノ丸山（ゆのまるやま）東側の野原では約 60 万株のレンゲツツジの花が咲き誇り、一面が鮮やかな朱色に染まる。国内最大級のレンゲツツジの群落というだけでなく、標高の高い場所にあり色彩も豊かなことから、この群落は 1956 年に国の天然記念物に指定された。

中世（12～16 世紀）以来、家畜の所有者はこの一帯の斜面を牛馬の放牧地として利用していた。放牧の際、家畜は他の植物は食べたが、ツツジは食べなかった。毒があったためである。こうして他の植物との競合もなく、ツツジは山の斜面一面に伸び伸びと広がることができたのである。

ツツジの花の鮮やかな朱色については、ある地元の伝説で次のような印象深い説明がなされている。昔、峠の南の村に住む少女が、峠の北の村に住む少年と恋に落ちた。2 人は深く愛し合っていたので、少女は毎晩 15 キロメートルの道のりを走り、山々を越えて少年に会いに行った後、村に帰っていった。しかし、これを良しとしない北の村の長老たちは 2 人を別れさせることにした。別れたくない 2 人は最後に地藏峠（じぞうとうげ）で会い、そこから一緒に飛び降りた。その血は下界の野原一面に飛び散り、ツツジの花になったと言われている、という内容だ。